

〔原著〕

親子の関わりについての母親の自己観察が 育児に及ぼす影響に関する実験的研究

— 2・3歳児との遊戯的相互作用のビデオ自己観察の効果 —

あゆのこ保育園：寺西美恵子
筑波大学心理学系：濱口 佳和

An experimental study on the influence of mothers' self observation of their relatedness
with their children to which exert on their child-rearing: The effect of video self observation
of mothers' play interaction with their two-to-three-year-old children

Mieko Teranishi and Yoshikazu Hamaguchi

問題と目的

現代の日本では、産業構造の変化とそれに伴う都市化の進展により、核家族化と地域の人間関係の希薄化が進むとともに成人男女の晩婚化・非婚化により少子化が進行してきた（国立社会保障・人口問題研究所，2002）。このように、特に都市部では家庭や地域社会で次世代を育成する機能は大きく後退した。エンゼルプラン、新エンゼルプラン、新・新エンゼルプランなど、多くの子育て支援施策が国や地方公共団体で行われるようになったが（内閣府，2005）、産休・育休の取得率の低さや、父親の家事・育児への参加の低さなど、子育て環境の問題が解消されたとはいまだ言い難い。

こうした中で母親は変わらず子どもの養育の主たる担い手であり続けている。平成15年度の人口動態統計特殊報告では、子の1歳半時期の母親の有職率は31.1%で、母親が無職の場合、平日日中の保育者は、ほぼ100%が母親となっている（厚生労働省大臣官房統計情報部，2004）。ソーシャルサポートの得にくさなど、孤立しやすい育児環境の中、特に乳幼児期の子育てが困難で、育児ストレス・育児不安の高まりから児童虐待に至るケースが後を絶たない（東京都福祉保健局，2005）。

このように、一緒に過ごす時間の長い母親は、父親に比べると子どもにとっての強い「環境圧」となりやすい存在で（酒井・菅原・菅原・木島・真希・詫摩・天羽，2003）、子どものパーソナリティと社会性の発達に少なからぬ影響を及ぼすことが明らかにされてきた（Baumrind，1967；Lamborn，Mounts，Steinberg & Dornbusch，1991）。最近のわが国の研究では、菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井（1999）の長期にわたる縦断的研究により、発達初期における子どもの養育困難な気質の特徴が母親の子どもへの否定的な愛着を規定し、この母親の否定的な愛着が10歳時の外在化（externalizing）問題傾向を予測することが明らかにされている。これは、当初は育児に否定的ではなかった母親も、育てにくい子どもの育児に奮闘する中、次第に子どもへの否定的な感情と養育態度を高め、やがてはそれが子どもの外在化問題に発展するという発達の悪循環を示す結果と言える。

多くの母親がこうした悪循環に陥りやすい時期として、子どもが自分なりの意図や計画を持って自発的な行動を多く行う2～3歳の時期が挙げられよう。この時期はいわゆる「第一反抗期」にあたるが、基本的生活習慣の獲得を目指していわゆる「しつけ」が母親により積極的に開始される時期でもある。よって、食事、衣

服着脱、洗顔・洗手、入浴、睡眠などの諸場面で、なんでも自分の思い通りにしたい子どもと、しつけを実行したい親との間でともすれば葛藤が生じやすい。こうしたときに見られる子どもの反抗的行動は「自己主張」の表れで（柏木、1988）、健全な自我発達の証でもあるのだが、否定的に捕らえる傾向が日本の母親には目立つという（飯長、1995）、また坂上（2003）は第一反抗期の子をもつ母親は、子どもの要求に合わせて、受け入れたりすることが困難になりやすいと指摘している。したがって、この時期親は子どもの自己主張の意味を正しく理解し、冷静に受け止めることが特に求められる。鯨岡（2002）は、子どもを育てることを通して育てる者も育てられると述べているが、これはまさにこの時期の親によく当てはまる。この時期の親には、特に、余裕を持って自分の育児を振り返る機会を保障し、それによって自ら子どもに対する向き合い方を確認し、模索し、修正しながら親として、人間として成長し続けることができるのではないかと考えられる。

人が自らの行動を観察することをここでは自己観察と呼ぶ。従来の心理学では行動療法の一技法であるセルフ・モニタリング（self monitoring）は最も近い概念である。これは、明確に定義された自己の標的行動あるいは症状をクライアント自身が予め定められた方法で観察・記録するものである。これによって、①第3者では観察困難な標的行動や症状の生起頻度や持続時間の記録、行動・症状が生じる先行事象や結果事象の特定が可能となり、②当該の行動や症状の改善が促進され、③その効果が評価される。多くの場合、青年・成人に対して適用され、対象となる行動には、対人的行動、神経性習癖、摂食行動、不安・恐怖反応、思考、感情などがある（祐宗・春木・小林、1984）。本研究で言う自己観察は、セルフ・モニタリングほど厳密に観察対象となる行動を絞り、その生起頻度などを客観的に記録することはない。観察の標的となる自己の行動は、観察者各自に自由に委ねられ、その生起頻度などの記録は特に求めずに、自分の行った行動をVTRなどで視聴

することをさす。

この様に自己の行動を振り返る方法には、自己の行動をVTRなどで録画し、それを観察するという手法がさまざまな分野で採用されている。たとえば、スポーツの分野ではVTRにより自己のフォームを観察し、理想的フォームとのギャップを修正する方法は一般的である。

近年では、自己観察を母親とのカウンセリングに導入し、母親の子どもに対する養育態度の改善に著効果を示した事例が報告されており（前田、1999）、親子の養育行動の変容にも有効であることが示されている。また、財部（2000）は、話し言葉のない精神遅滞児と母親を対象にビデオ・フィードバックと自己記録の手続きにより、母子の自由遊び場面を通してコミュニケーションの進展を図ることを目的に研究を行ったが、母親の子どもに対する認識の深まりは、ビデオ・フィードバックおよび自己記録のいずれもが影響し、母親の応答行動にビデオ・フィードバックが特に大きく影響したと述べている。そして母親自身の子どもに対する応対や認識を修正することに効果をもたらしたと述べている。この様に、日常的な育児場面の自己観察により、育児に対する自己の自発的な気づきを促し、育児意識と養育行動が変容することが期待できる。

これまで、ビデオを使用した自己観察の研究は例が少なく、しかも幼児期早期の親子の相互作用場面については見あたらない。しかし、以上に述べた先行研究の結果から、母親が自己の育児行動をビデオで客観的に観察・評定することにより、自己の育児行動を改めて捉えなおし、自己の育児行動の特徴について認識を深めることを通して、子どもへのよりよい関わり方の指針を得ることができると考えられる。

そこで本研究では、①母親がビデオを用いて養育行動の自己観察を行うことにより、母親自身の子どもへの関わり方や、親と関わる子どもの様子についての認識がどのように変化するか、②ビデオ自己観察による母親自身の養育行動の認識ならびに子どもの印象の変化が、実験前後の日常の育児不安ならびに養育行動の変化にど

のような関連があるのか、③母親の特性（自己意識、育児不安、抑うつ・不安傾向）と、ビデオ自己観察による養育行動の自己認識や子どもの印象の変化にどのような関連があるのか、を検討することが目的とされた。

方 法

1. 研究協力者

2歳～3歳児とその母親、計22組（男児8名、女児14名；平均年齢2歳6ヶ月）。東京都近郊の幼稚園や親子教室等を通じて、ビデオを使用した「親子の遊び」に母子で参加し、前後2回に郵送質問紙調査を実施するという内容の研究への協力者の募集を行った。これに応じた母子を対象者とした。

2. 調査時期

2005年7月～11月

3. 調査内容

調査手続き：実験1週間前に郵送による質問紙調査を実施後、筑波大学大塚校舎の大遊戯室で親子一組ずつの個別実験を実施。実験1週間後に再度郵送による質問紙調査を実施した（Figure 1）。

質問紙の構成：

（1）郵送質問紙

a. 発達スクリーニング検査：KIDS（乳幼児発達スケール；三宅，1991）のタイプB（1歳0ヶ月～2歳11ヶ月）およびタイプC（3歳0ヶ月～6歳11ヶ月）の下位尺度より、「操作」「理解言語」「表出言語」「対成人社会性」「しつけ」を使用した。

b. 育児不安尺度：牧野（1982）の育児不安尺度（14項目4段階評定）を使用した。

c. 養育行動尺度：佐藤・佐藤・岡安・立元（2001）の養育スキル尺度を採用（「罰」、「一貫性のないしつけ」、「援助的言葉かけ」、「コミュニケーション」、「制限」、「無関心」の6下位尺度）。ただし下位尺度の「無関心」は、設問が今回の対象者の実情とあわないため、FDT（Family Diagnostic Test；東・柏木・繁多・唐澤，2002）の下位尺度の「無関心」（5項目，4段階評定）を採用した。

d. 自意識尺度：菅原（2001）の自意識尺度を使用。「公的自意識」尺度（11項目）、「私的自意識」尺度（10項目），7段階評定

e1. 自由記述：現在、困っていることや不安なこと e2. 自由記述：①参加して感じたこと②子育てで重視していること③子どもとの印象的なエピソード④感想。

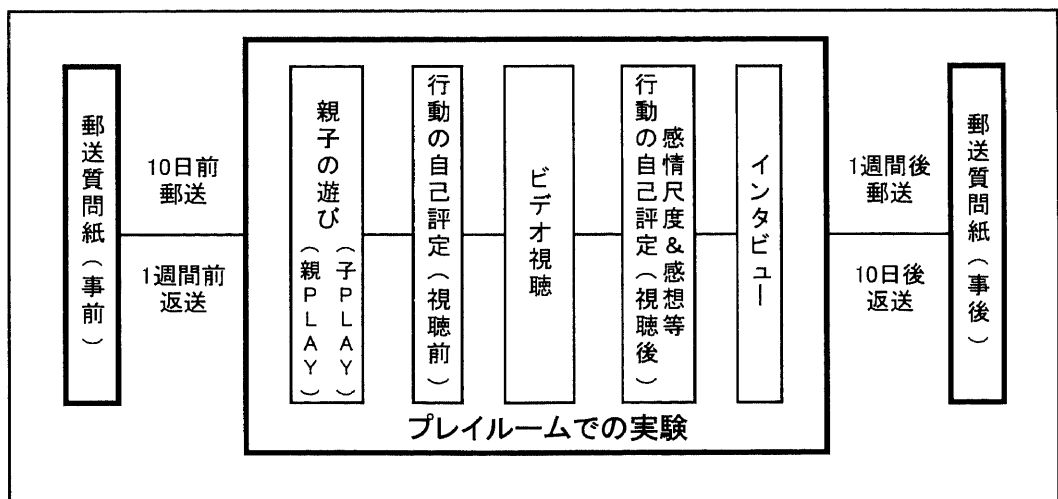


Fig. 1 手続き

事前テストではa, b, c, d, e1が, 事後テストではb, c, e2が使用された。

(2) 実験時

f. 行動の自己評定(4段階評定): 親の関わり行動16項目(Positive項目11, Negative項目5)・子どもの印象14項目(4段階評定)(Positive項目8・Negative項目6)。心理学系の専門家とT大大学院生2名で作成し, 2組の親子(2歳3ヶ月男児・2歳4ヶ月女児)に対してプレ調査とともにインタビューを行い, 項目の妥当性について検討した。

g. 親の感情: 多面的感情状態尺度(寺崎・岸本・古賀, 2001)より, 24項目(4段階評定)。下位尺度, 「抑鬱・不安」(簡易版5項目)の他, 「敵意」「倦怠」「活動的快」「非活動的快」「親和」「集中」「驚愕」よりそれぞれ2項目ずつ採用した。

h. 感想等: ①親子の遊びに関する質問(日常の遊び方と日常との違い) ②感想(自由記述)

4. 実験内容

(1) 実験場所: 筑波大学大塚キャンパス大ブレイルームで行い, あらかじめ, 親子遊びが展開しやすいように, ボール・フープ・クルマ・積み木・人形・おもまごとセット・パズルなど, 動的活動と静的活動の両方を促す要素を含み, 2〜3歳児が遊ぶのに適した数種類の玩具を壁際に用意した。

(2) 「親子の遊び」の内容: 親子の遊びについては, Forehand & Long (1996) の“Parent's Game” “Child's Game”を参考にし, 親子の関わり場面の行動が偏らないように, 「親PLAY」「子PLAY」と定義し, この2種類の遊びを行うように依頼した。「親PLAY」は親が子どもに誘いかけて遊ぶ遊び方で, 実験時には理解しやすいように, 「親主体の遊び」と説明し, 「子PLAY」は子どもがやりたい遊びを, 親が一緒に行う遊び方とし, 実験時には, 「子ども主体の遊び」と説明した。

(3) ビデオ撮影及び視聴: ビデオ機材は, ブレイルームのコーナーに三脚を使用して設置し, 撮影した。撮影については, あらかじめ母親の

了承をとっていたが, 自己のビデオ視聴を行うことは, 事前に知らせなかった。視聴用のモニターとしてあらかじめ室内に設置されているキャスター付きの台に載せたTVを使用した。

(4) 実験手続き:

a. 実験の流れ

親子がリラックスして実験に参加できるように慣れの場面を約10分間設け, 実験に関する説明を受けた後, 親子で14分間遊んでもらった(①「親PLAY」②「子PLAY」それぞれ7分間, ①②の順番は親の選択にゆだねた)。遊び場面は第一著者がビデオ撮影した。14分間の遊びが終了した直後に, 遊びにおける親の関わり行動, 子どもの印象について, 行動の自己評定リストを記入してもらった。その後, 撮影された14分間の遊び場面のビデオを自己観察し, その後再度, 行動の自己評定リスト(親の関わり行動, 子どもの印象)と感情尺度・感想等の質問紙に回答を求めた後, 第一著者が母親に対してインタビューを行った(約10分)。

b. 教示内容

①研究の説明: 「ここで, 親子で自由に遊んでいただきますが, お子さん主体(「子PLAY」)の遊びとお母さん主体の遊び(「親PLAY」)の2種類の遊び方で遊んでください。お子さん主体の遊びでは, お子さんが好きなおもちゃでやりたい遊びを自由にしてもらってください。お母さんが主体の遊びでは, お母さんが, ここにあるおもちゃを使って何をしようかと遊びのイメージを持っていただき, お母さんがリードしてお子さんと一緒に遊ぶようにしてください。途中で声をかけますので, そうしましたら役割を交代してください」と教示した。②「子PLAY」: 子どもに対しては, 「おもちゃがたくさんありますね。○○ちゃんの好きな遊びをお母さんと一緒にしましょう」, 親に対しては「お母さんも○○ちゃんと一緒に楽しく遊んでくださいね」と教示した。③「親PLAY」: 子に対しては「おもちゃがたくさんありますね。お母さんはどんな遊びが好きかな。お母さんの好きな遊びを○○ちゃんも一緒にやってね」, 親に対しては「お母さんが主体となって自由に遊

んでください。特にしなければならないことはありませんが、どんな遊びにするかをお母さんがイメージして、お子さんをリードして楽しく遊んでくださいね」と教示した。

結 果

1. ビデオ視聴前後の子どもの印象と親の関わり行動評定値の変化

ビデオ視聴前後の母親の評定平均値について、全体的にみると、「子どもの印象項目 (Table 1)」「親の関わり行動項目 (Table 2)」ともにおしなべて Positive 項目は高く、Negative 項目は低い値を示しており、視聴前後も総じて肯定的な評価を与えている。子どもの Negative な印象項目では「親を気にした」は比較的高い値であり、「親の関わり行動項目」では Positive な行動の中では「なだめた」が低く、Negative な行動の中では「指示した」が高い値を示していた。

ビデオ視聴前後の行動自己評定による自己認識の変化で有意な差が見られたのは、子どもの印象では、「ものおじしなかった」が視聴後に高くなり（有意傾向）、「不安気だった」が低下し、「親を気にした」で高まったというものであった。親の関わり行動では、「批判した」が高まる傾向が見られた。これらの結果は、母親が子どもとの相互作用を直後にビデオで見た場合、相互作用中に持っていた自分のかかわりや子どもの様子についての認識と、ビデオで見た後で生じる認識とはわずかながらもずれがあること、そして、ビデオ視聴後は、子どもは最初思っていたほど不安で萎縮していたわけではなく、母親自身は思っていたよりも子どもに対して批判的であったと認識が変化したことを意味するものである。

2. 実験前後の育児不安、養育態度の変化

ビデオ自己観察による個別実験への参加の影響を見るために、郵送質問紙による実験参加前後の「育児不安」と「養育スキル」の変化を見たところ (Table 3)、「育児不安」のみ事後で

有意に低くなり、実験参加後に育児不安が低下することが示唆された。「養育スキル」については、まったく有意差は見られなかった。

3. ビデオ視聴前後の認知の変化と実験前後の育児不安・養育行動の変化との相関

ビデオによる自己観察前後の親の関わり行動の評定値の差（観察後－観察前）を変化と捉え、Positive 項目と Negative 項目ごとに合算した（以下、子どもの印象 Positive 項目＝＜-CP＞、子どもの印象 Negative 項目＝＜-CN＞、親の関わり行動 Positive 項目＝＜-PP＞、親の関わり行動 Negative 項目＝＜-PN＞と表記）。ビデオ自己観察前後の自己の行動評定や子どもの印象の変化と、実験前後の日常の育児不安および養育行動の変化（事後－事前）との相関を算出した (Table 4)。その結果、実験場面での母親の関わり行動の評定の変化は、実験前後での日常の育児不安や養育行動との相関がまったく見られなかった。実験場面の自己観察によって親が自分の子どもへのかかわりに何らかの変容を認めたとしても、そのことが日常の育児不安や養育態度の変化へとつながるとは言えなかったのである。その一方で、ビデオ自己観察によって母親に生じた子どもの印象の変化は、実験前後の母親の日常の養育行動と有意な関連が見られた。つまり＜-CP＞と「援助的言葉かけ」、「コミュニケーション」の間にそれぞれ相関が見られ ($r = -.52, p < .05$; $r = -.45, p < .05$)、＜-CN＞と「一貫性のないしつけ」「無関心」の間にそれぞれ負の相関が見られたのである ($r = -.46, p < .05$; $r = -.4, p < .10$)。これは実験場面での自己観察による子どもの Positive 面への気づきが高いほど、実験前から後にかけて母親の援助的言葉かけやコミュニケーションが低下すること、そして、子どもの Negative 面への気づきが高いほど母親の一貫性のないしつけや無関心が低下する傾向があることを示しており、親子の遊戯的相互作用のビデオによる自己観察を通じて、母親が子どもの行動についての新たな気づきを得ることが、親のその後の養育行動を変化させる可能性

Table 1 ビデオ視聴前後の自己評定の平均値の差の検定（子どもの印象項目）

	視聴前		視聴後		t
	M	(SD)	M	(SD)	($df = 21$)
Positive					
1. 活発だった	3.36	(0.73)	3.41	(0.91)	-0.44
2. 夢中になった	3.55	(0.67)	3.55	(0.59)	0.00
3. 笑顔だった	3.50	(0.74)	3.50	(0.67)	0.00
5. 応答した	3.23	(0.87)	3.41	(0.84)	-1.12
6. 楽しんでいた	3.68	(0.57)	3.77	(0.53)	-1.45
9. ものおじしなかった	3.55	(0.60)	3.77	(0.53)	-2.02†
12. リラックスしていた	3.41	(0.50)	3.50	(0.60)	-0.81
14. 機嫌がよかった	3.86	(0.47)	3.82	(0.66)	1.00
Negative					
4. 不安気だった	1.68	(0.47)	1.27	(0.55)	2.61*
7. 親を気にした	2.27	(0.88)	2.64	(0.92)	-2.16*
8. すねた・怒った	1.36	(0.95)	1.23	(0.69)	0.77
10. 戸惑っていた	1.77	(0.75)	1.77	(0.69)	0.00
11. 言うことを聞かなかった	1.82	(0.91)	1.86	(0.89)	-0.33
13. 親にまわりついていた	1.68	(0.65)	1.64	(0.58)	0.25

† $p < .10$, * $p < 0.5$

Table 2 ビデオ視聴前後の自己評定の平均値の差の検定（親の関わり項目）

	視聴前		視聴後		t
	M	(SD)	M	(SD)	($df = 21$)
Positive					
1. 目で合図した	2.14	(0.77)	2.14	(0.94)	0.00
7. なだめた	1.32	(0.65)	1.50	(0.86)	-1.07
8. 名前を呼んだ	2.91	(1.02)	3.05	(0.90)	-0.77
9. 笑顔で接した	3.36	(0.73)	3.14	(0.83)	1.56
10. 誉めた	3.05	(0.56)	2.86	(0.71)	1.70
11. 注目した	3.68	(0.48)	3.59	(0.59)	1.00
12. 同意した	3.45	(0.51)	3.41	(0.59)	0.32
13. 励ました	2.68	(0.78)	2.68	(0.78)	0.00
14. 応答した	3.41	(0.73)	3.45	(0.67)	-0.44
15. 誘った	3.45	(0.60)	3.23	(0.81)	1.31
16. スキンシップした	2.27	(0.70)	2.18	(0.80)	0.70
Negative					
2. 叱った	1.32	(0.72)	1.41	(0.73)	-0.70
3. 指示した	2.91	(0.68)	3.05	(0.90)	-0.90
4. 批判した	1.50	(0.67)	1.86	(0.77)	-2.01†
5. 禁止した	1.55	(0.86)	1.41	(0.73)	0.83
6. 無視した	1.14	(0.35)	1.18	(0.50)	-0.37

† $p < .10$

Table 3 実験参加前後の平均値の差のt検定（育児不安と養育行動）

	事前		事後		t (df=21)
	M	(SD)	M	(SD)	
育児不安	33.50	(5.21)	31.86	(4.49)	2.28*
罰	13.27	(4.24)	13.09	(2.97)	0.34
一貫性のないしつけ	11.91	(2.27)	11.73	(2.73)	0.39
援助的言葉かけ	17.64	(1.87)	17.73	(2.00)	-0.25
コミュニケーション	10.59	(1.74)	10.82	(1.26)	-0.72
制限	8.32	(1.78)	8.68	(2.12)	-1.43
無関心	8.55	(2.40)	8.73	(2.23)	-0.47

*p<0.5

Table 4 ビデオ視聴前後の認知の変化と実験前後の育児不安・養育行動変化との相関

	<- CP >	<- CN >	<- PP >	<- PN >
<- 育児不安 >	.100	.150	-.100	-.160
<- 罰 >	-.540	-.190	.070	-.170
<- 一貫性のないしつけ >	-.520	-.460*	.340	-.310
<- 援助的言葉かけ >	-.520*	-.220	.080	.120
<- コミュニケーション >	-.450*	-.120	.180	-.120
<- 制限 >	-.340	-.120	.010	-.110
<- 無関心 >	-.180	-.400†	-.120	-.120

†p<.10, *p<0.5

※ビデオ視聴による見方の変化を自己評定値の観察後-観察前（差）として、それぞれ以下のように記した

<- CP > = 子どもの印象 Positive 項目, <- CN > = 子どもの印象 Negative 項目

<- PP > = 親の関わり行動 Positive 項目, <- PN > = 親の関わり行動 Negative 項目

※実験参加前後の育児不安、養育態度の各項目の変化を差（事後-事前）として、それぞれ以下のように記した

<- 育児不安 > <- 罰 > <- 一貫性のないしつけ > <- 援助的言葉かけ > <- コミュニケーション > <- 制限 >

<- 無関心 >

が示唆されたと言えよう。

4. 母親の特性要因間の相関

母親の特性要因として、「公的自意識」、「私的自意識」、「抑鬱・不安」、「育児不安」を取り上げたが、これらの尺度間の関連について相関を見たところ、すべて有意ではなかった（Table 5）。ただしこれは調査対象者数が少ないために有意とならなかった可能性もある。ちなみに、有意ではないが相関係数の値そのものを見ると、公的自意識と私的自意識の間、公的自意識と育児不安の間に低い正の相関が、私的自意識と育児不安との間には低い負の相関が見られる。さらに、母親の特性要因と実験前の「養育行動」との相関を見た結果（Table 6）、

「私的自意識」とは「一貫性のないしつけ」「援助的言葉かけ」「制限」のそれぞれで正の相関（ $r = .365, p < .10$; $r = .404, p < .10$; $r = .430, p < .05$ ）, 「抑鬱・不安」は「一貫性のないしつけ」で正の相関（ $r = .427, p < .05$ ）, 「育児不安」は「無関心」と正の相関（ $r = .464, p < .05$ ）を示した。この結果より、私的自意識が高い人は、援助的言葉かけが多く、子どもに制限を要求するが、一貫性のないしつけをしがちであること、抑鬱・不安が高い人は一貫性のないしつけをしがちであり、育児不安が高い人は、子どもに無関心になりがちと言えよう。

5. ビデオ視聴前後の認知の変化と母親の特性要因との関連

ビデオによる自己観察前後の親の関わり行動の評定と「公的自意識」との関連を見たところ、 $<-PP>$ と正の相関が有意傾向を示し($r=.410$, $p<.10$)、母親の公的自意識が高いほど、ビデオによる自己観察を通じて、親自身のPositiveな対応への気づきが高まる傾向が示された。他の項目については、調査対象者数が少ないために有意な相関はみられなかったものの、「私的自意識」と $<-CP>$ ($r=.200$, ns), 「育児不安」と $<-CP>$ ($r=-.300$, ns), 「抑鬱・不安」と $<-CN>$ ($r=.200$, ns), 「抑鬱・不安」と $<-PN>$ ($r=.200$, ns) という相関が見られている。これらは順に、私的自意

識が高いほど子どものポジティブな面への気づきが多くなる、育児不安が高いほど、子どものポジティブな面への気づきが少なくなる、抑うつ・不安傾向が高いほど、子どもおよび親のネガティブな面への気づきが多くなる、ということの意味している。

考 察

本研究の第一の目的は、ビデオによる子どもとの遊戯場面における相互作用の自己観察が母親自身の子どもへのかかわり行動についての認識やそのときの子どもの様子についての印象にどのような変化をもたらすのかを検証することであった。

Table 5 母親の特性要因間の相関 (自意識尺度, 抑鬱・不安, 育児不安)

	公的自意識	私的自意識	抑鬱・不安	育児不安
公的自意識				
私的自意識	.247			
抑鬱・不安	-.115	-.182		
育児不安	.322	-.337	.063	

Table 6 母親の特性要因と実験前の養育行動との相関

	公的自意識	私的自意識	抑鬱・不安	育児不安
罰	.204	.026	.044	.338
一貫性のないしつけ	.178	.365†	.427*	-.056
援助的言葉かけ	-.104	.404†	-.156	-.294
コミュニケーション	-.223	.108	-.157	-.145
制限	.161	.430*	.037	.028
無関心	.262	.124	.054	.464*

† $p<.10$, * $p<.05$

Table 7 ビデオ視聴による認知の変化と母親特性との相関 (自意識尺度・抑うつ・育児不安)

	$<-CP>$	$<-CN>$	$<-PP>$	$<-PN>$
公的自意識	-.110	-.100	.410†	-.050
私的自意識	.200	.020	-.030	.070
抑鬱・不安	.030	.200	-.140	.200
育児不安	-.300	-.030	.040	.160

† $p<.10$

ビデオ視聴による見方の変化を自己評定値の視聴後－視聴前(差)として、それぞれ以下のように記した

$<-CP>$ = 子どもの印象 Positive 項目, $<-CN>$ = 子どもの印象 Negative 項目

$<-PP>$ = 親の関わり行動 Positive 項目, $<-PN>$ = 親の関わり行動 Negative 項目

まず、ビデオによる相互作用の自己観察の前後で、子どもの印象では3項目、親自身の行動で1項目で有意差が見られた。これらの結果は、母親が子どもとの相互作用を直後にビデオで見た場合、相互作用中に抱いていた自分のかかわりや子どもの様子についての認識と、ビデオで見た後で生じる認識とはわずかながらもずれがあること、そして、ビデオ視聴後は、子どもは最初思っていたほど不安で萎縮していたわけではなく、母親自身は思っていたよりも子どもに対して批判的であったと認識が変化したことを意味する。大学のプレイルームは子どもにとっては新奇場面であり、「当然子どもは緊張しているはずだ」という先入観が、母親に強く働いていたため、母親は相互作用の最中の子どもの緊張を実際以上に過剰に見積もり、「萎縮している」と認識してしまったのではないだろうか。母親が思いのほか批判的な印象を残したのは、親PLAYで子どもに指示をすることが求められており、指示を与える様子を後で見ると批判的と見えたのかも知れない。

このような変化が自己観察前後で見られたとはいえ、母親自身の行動についても、子どもの印象についても、おしなべて一貫して肯定的な見方がなされており、自己観察前後で殆ど変化が見られなかった。これは、子どもの印象や親の行動を評定する多くの項目が、天井効果や床効果を示していたことから、これらの項目が幅広い個人差を捉えるには十分でなかった結果と言えるかもしれない。しかし一方で、本研究の調査対象となった母親達が、適応的で、おおむね良好な母子関係を持っている人達から構成されていることは実験前の個人特性の査定で確認されており、彼女たちが比較的正確に実行中の自己の行動と子どもの状態を認識し、その良好な母子関係を反映する評定を自己観察の前後で一貫して行ったためこのような結果となったとも考えられる。

本研究の第2の目的は、ビデオ自己観察による母親自身の養育行動の認識ならびに子どもの印象の変化が、実験前後の日常の育児不安ならびに養育行動の変化にどのような関連があるの

かを明らかにすることであった。

実験の前後では、日常の養育行動に変化は見られないものの、育児不安が有意に低下することが示された。この変化がビデオによる自己観察のために生じた母親自身の子どものかかわり方についての認識の変化やそのときの子どもの印象の変化と関連があるか検討したところ、実験前後の育児不安と自己観察による変化とはなんら関係がなかった。実験の前から後にかけてどのような要因が作用して育児不安の低下をもたらしたのか特定はできないが、こうした実験に参加したこと自体が母親に何らかの安心感を与え、偽薬効果として現れた可能性もあろう。

ところで、実験前後にかけて、母親の自己観察による養育スキルの有意な変化は見られなかった。しかしながら、自己観察による子どもならびに自己の行動の印象の変化と、実験前後の養育スキルの変化の相関を検討した結果、「子どもの印象Positive項目」の変化と、母親の「援助的言葉かけ」、ならびに「コミュニケーション」の変化との間にそれぞれ負の相関が見られ、また、「子どもの印象Negative項目」の変化と母親の「一貫性のないしつけ」、ならびに「無関心」との変化との間には負の相関が見られた。これらの結果は、遊戯場面での相互作用を母親が自己観察した後、子どもについての肯定的印象が増加すると、実験終了後、「援助的言葉かけ」や「コミュニケーション」を差し控える母親の変化が生じ、逆に否定的な印象が増加すると、ふだんの子どもの行動により関心を示し、しつけの一貫性がより高まることを示唆するものである。ビデオを見た後子どもの印象が肯定的になると、子どもへの肯定的な言葉かけが抑制され、子どもの印象が否定的に変化すると、子どもの行動をよく見て一貫した姿勢で対応するようになるという本研究の結果は、さながら母親が育児に費やす労力を、無駄に費やすことなく効率的に活用させている様子を伺わせ、興味深いものである。今後の追試においてこのような法則性が再現されるか検討を重ねる必要がある。

実験前後で養育行動に有意な差が見られな

かったことをあわせて考えると、自己観察すること自体が一定の方向性を持った変化を生じさせるのではなく、それによって子どもへの印象がどのように変化したかということが、実験後の養育行動の実行を左右する可能性を示す結果と言えるかもしれない。

本研究の第3の目的は、母親の特性（自己意識、育児不安、抑うつ・不安傾向）と、ビデオ自己観察による養育行動の自己認識や子どもの印象の変化にどのような関連があるのかを検討することであった。

ビデオの自己観察による見方の変化については、ビデオ自己観察後、公的自意識が高い母親は、自らの関わり行動をより Positive に見る傾向があることが明らかにされた。従来の研究では公的自意識が高まると、自己評価が低下しやすいという知見があるが、今回は異なる結果となった。これはビデオ視聴の結果、子どもが当初思っていたよりは肯定的な反応を示していたため、公的自意識の高い親は特に、ビデオ視聴後に自己の養育スキルの肯定的な側面への注目を高めたためではないかと推察される。本研究ではサンプル数の少なさから有意とならなかったが、以上のほかにも、私的自意識、抑うつ・不安傾向がビデオ視聴前後の母親自身の関わり方についての認識の変化や子どもの印象の変化と有意相関が示される可能性がある。これらについても被験者数を増やして今後さらに検討を加えるべきだが、ビデオによる親子の遊戯的相互作用の母親による自己観察の効果は、こうした母親の特性によって左右される可能性が濃厚である。よって、今後の研究においては、母親の自己意識、育児不安、抑うつ・不安傾向といった要因を調整変数として加えた上で、ビデオによる自己観察の効果を検討する必要性が出てくることになると思われる。

以上のことを総合すると、ビデオによる育児場面の自己観察は、自分との関わり場面の子どもの様子をビデオにより再認識する事で、母親が養育行動を変化させる可能性があると言える。母親が子どもとの関わりを見直す機会というのは、自己が望むより適切な育児を行うため

にも、大事なことである。ビデオによる育児場面の自己観察は、その機会を提供する一つの方法として有効であるかもしれない。

最後に本研究の方法論的な問題点について触れておく。まず実験対象となったサンプルの問題がある。本研究のサンプル数は少なく、多変量解析に耐えなかった。今後はサンプル数を増やすことで、統計的にさらに明らかな結果を導くことが必要である。サンプルの質的な偏りも結果に影響を与えたかもしれない。被験者は研究に積極的に参加した人たちであり、おしなべて適応的で良好な親子関係を持つ人々であった。そのため、対象者についてはリクルートの方法も含めて再考が必要である。

次に実験群のみで統制群を置かないデザインを採用したことも問題である。このため、ビデオ自己観察前後の全ての測度の変化が、ビデオ自己観察によるものか否か判断できない状況にある。今後は人道的な点に十分配慮しつつ、統制群を設けることで比較することが必要である。

ビデオ視聴前後の自己評定リストと実験前後の質問紙法による調査を行ったが、ビデオ視聴前後の自己評定リストについては、独自に作成したものであり、4段階評定による天井効果・フロア効果が出た。今後は内容の検討を行い精緻化することが必要である。

実験前後の質問紙法については、実験の前後1週間を目安に回収したが、期間としての適正さその他の要因の混入の可能性についても検討する必要があると思われる。実験後に育児不安が低下したが、ビデオ視聴との関連が見出せなかったため、実験に参加するという行為自体に、何らかの付加価値を感じたという可能性も考えられる。要因を明らかにするために、さらなる検討が必要であろう。

以上の問題点を踏まえて今後更なる検討が加えられなければならない。

引用文献

東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤真弓
2002 FDT 親子関係診断検査 日本文化科

- 学社.
- Baumrind, D. 1967 Childcare practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Forehand, R. & Long, N. 1996 *Parenting the strong-willed child*. McGraw-hill Companies, Inc.
- 飯長喜一郎 1995 自己主張の発達と母親の態度 二宮克美・南徹弘・氏家達夫・繁多進・浜崎隆司(編著)『たくましい社会性を育てる』第4章 有斐閣.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に— 東京大学出版会.
- 鯨岡峻 2002 <育てられる者>から<育てる者>へ 関係発達の視点から NHK ブックス.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2002 少子社会の子育て支援 東京大学出版会.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2004 平成15年度人口動態統計特殊報告「出生前後の就業変化に関する統計」の概況 厚生統計協会.
- Lamborn, S.D., Mounts, N.S., Steinberg, L. & Dornbusch, S.M. 1991 Patterns of competence and adjustments among adolescents from authoritative authoritarian indulgent and neglectful families. *Child Development*, 62, 1049-1065.
- 前田基成 1992 自己観察による母親の養育態度の変容 上田女子短期大学 児童文化研究所報, 14, 59-70.
- 牧野カツ子 1982 乳幼児を持つ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, 14, 34-56.
- 三宅和夫(監修) 1991 KIDS 乳幼児発達スケール 発達科学教育センター.
- 内閣府 2005 平成16年版少子化社会白書 ぎょうせい.
- 坂上裕子 2003 歩行開始期における母子の発達—子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討— 発達心理学研究, 14, 257-271.
- 酒井厚・菅原ますみ・菅原健介・木島伸彦・真希城和美・詫摩武俊・天羽幸子 2003 子どもによる親への対人的信頼感 発達心理学研究, 14, 191-200.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・立元真 2001 地域子育て支援センターにおける親子への対人行動訓練養育スキル法の開発 研究報告書 平成12年度産学連携等研究(宮崎県児童家庭課).
- 仙田満 1996 子どもの生活環境・住環境 高橋重宏・網野武博・柏女霊峰(編著) ハイライト子ども家庭白書 川島書店.
- 菅原健介 2001 自意識尺度 心理測定尺度集 I 堀洋道監修 山本真理子編—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉— サイエンス社.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達也・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達—Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から— 発達心理学研究, 10, 32-45.
- 財部盛久 2000 話しことばのない精神遅滞幼児をもつ母親に対するビデオ・フィードバックと自己記録を用いたコミュニケーション支援 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 2, 45-59.
- 祐宗省三・春木豊・小林重雄 1984 新版行動療法 川島書店.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 2001 多面的感情状態尺度 心理測定尺度集 I 堀洋道監修 山本真理子編—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉— サイエンス社.
- 東京都福祉保健局 2005 児童虐待の実態 II —東京の児童相談所の事例にみる—. <http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/syoushi/news/presssyoushi051220-4.pdf> (2005年12月30日)